



宮城学院広報
MIYAGI GAKUIN

vol.
168

2023.3

タイトル「Glory to God」は宮城学院の校歌「天にみ
栄え」の英訳であり、本学院のキリスト教精神を象
徴する言葉。旧東三番丁キャンパスの講堂内にも、
この言葉が掲げられていた。

Glory to God

巻頭言

宮城学院の土台

学院長 佐々木 哲夫

特集

宮城学院での思い出

—旅立ちの時を迎えて—

MG TOPICS

卒業生紹介

遠藤 紗貴さん 鈴木 麻由子さん

宮城学院の土台

学院長 佐々木 哲夫

詩編67:1-8, マタイ28:19-20

北米合衆国ドイツ改革派教会の海外伝道局は、高札の撤廃や横浜での宣教師バラの働きに鑑み、1876年の総会で日本を伝道地に決定しました。宮城学院創立の労を担うことになる女性宣教師のプールボーとオールの送別礼拝が、1886年6月1日ペンシルバニア州 Harrisburg 市のセイラム・リフォームド教会で行われています。表題は、その時に用いられた讃美歌と聖書箇所です。

最初に構想された学校名は、宮城英和女学校です。設置目的は「基督教主義の道徳を基とし、最良の方法をもって高等普通の学課を女子に授け、善良有智の婦人を育成し、以って女子たるに愧ずるなからしめんとするにあり」で、校則は「清潔で身だしなみをよくし、慎み深い礼儀作法を守り、目上の者や教師に対し敬意をもって従い、清く正しい

言葉を用い、友情を培い、神を敬うことによって、おのれの品性をたかめること。儉約を重んじ、学問に励む習慣を身につけなければならない」でした。

プールボーからの手紙には、英語を一言も話せない首席の女子学生が三ヶ月後に英語の書物3ページを一言も間違わずに朗読したこと、また、押川牧師によって洗礼を受けたことなどが報告されています。プールボーは、日本の将来は彼女たちの人格にかかっていると記し、女学校にふさわしい校舎の建設を訴えたのです。

聖書の言葉に応じて開国まもない日本に人生をかけた若い女性宣教師たちの信仰を土台として今日の宮城学院があることに思いを馳せるものです。

MG
TOPICS

法人

「宮城学院クリスマスを祝う音楽会」が開催されました

12月10日(土)「宮城学院クリスマスを祝う音楽会」が開催されました。はじめに、礼拝堂にて佐々木 哲夫学院長の司式による開会礼拝が執り行われ、温かい雰囲気の中で会がスタートしました。小ホールを会場に行われた、音楽科による「讃美歌で紡ぐクリスマスものがたり」では、クリスマス・シーズンを彩る「きよしこの夜」や「もろびとこぞりて」などの讃美歌の響きを歌と演奏で学生たちが表現。日頃の学びが存分に発揮される場となりました。

クリスマス・チャペルコンサートには仙台フィルハーモニー管弦楽団コンサートマスターで本学音楽科特命教授の神谷 未穂(ヴァイオリン)と、同じく音楽科准教授の井坂 恵(メゾ・ソプラノ)が登場。圧巻の演奏と歌声に超満員の来場者からは惜しみない拍手が送られました。

この日は他にも、音楽リエゾンセンター「楽友」が贈るミニコンサート、大学ウインドオーケストラ部ミニコンサート、大学聖歌隊によるミニコンサートが時間をずらして行われ、礼拝の祈りと音楽にあふれた宮城学院らしいクリスマスのイベントとなりました。



MG TOPICS

宮城学院 (MG) の法人、大学、中学校・高等学校、こども園の様々な行事や取組、実績等を写真と記事でお届けします。

大正期の宮城女学生たち ～清水アイさんご家族からの寄贈写真から～

法人

資料室では、本学院が所蔵する資料を年報で紹介し、本学の歴史を広く知っていただくための活動をしています。

2023年3月に発行される「資料室年報第28号」では、「大正期の宮城女学生たち」と題して、卒業生 清水アイさんご家族様からご提供いただいた写真を、解説を加え紹介しています。写真は、アイさんが所属していた女子青年会メンバーの集合写真、創立四十年に行われた運動会、専攻科の先生方など、資料室に所蔵されていないものも多々ありました。また、ご寄贈いただいた写真は、保存状態もよく、いくつかの写真には裏書があり、撮影された年月日や人物名を特定することができ、貴重な資料となりました。

お母さまの思い出の詰まった写真をご寄贈くださったご家族様に心より感謝申し上げますとともに、資料室では、今後も、時代を越えて本学の歴史を語り継ぐ資料をみなさんにご紹介していきたいと思っています。



アイさん(前列左から3番目)は、土井 照(土井晩翠氏長女:後列左端)や畠山千代子(『隻手への挽歌』著者:後列右端)と宮城女学校女子青年会で活躍していた。裏書には、メンバー全員の氏名と大正十年三月二十日の日付が記入されている。



1926 (大正15) 年10月21日、宮城女学校創立四十周年を記念し行われた陸上運動会。競技種目「生存競争」は、現在の「パン食い競争」であろうか。当時の体操着は、セーラーとブルマーであった。

清水アイさん(旧姓:佐藤)

1917年 宮城女学校高等女学科入学

1925年 同音楽専攻科卒業、その後、
1943年まで音楽専攻科教員として本校に勤務した。

3年ぶりに来場型の大学祭を開催しました



10月15日(土)16日(日)の2日間、3年ぶりに対面形式での大学祭が開催されました。

2022年度のテーマは「POWER PAL GIRLS」 “パワーパフガールズ”という漫画・アニメのキャラクターをモチーフに、「POWER」「GIRLS」のキーワードには女子大学の力を発揮したいという気持ち、「PAL」(仲間)のキーワードには、仲間同士協力し合って大学祭を成功させたいという願いが込められました。

新型コロナウイルス感染症の影響により、学内限定やオンライン開催が続いていた大学祭ですが、感染防止対策に努めながらコロナ禍以前のような大学祭へできる限り近づけることを目標に、ご参加くださる方々とともに輝ける大学祭を目指しました。

また、同時開催のオープンキャンパスでは、「学生による学びの成果発表」が行われ、「入試相談ブース」「留学相談ブース」の個人相談コーナーも設けられました。成果発表では、日ごろのような研究に取り組んでいるのか、各学科・専攻の学生から授業や実習内容の紹介が行われました。

学内外から約3,000名もの多くの皆さまにご来場いただいたキャンパスは、2日間好天に恵まれ、活気ある雰囲気に包まれました。皆さまのご来場、誠にありがとうございました。



感染症対策として来場受付は予約制で行いました



オープニング演舞を披露したよさこい部



クラス、サークルの模擬店も多数出店

現代ビジネス学科石原ゼミ
「学生地域づくり・交流大賞」で「大賞」を受賞

大学



現代ビジネス学科石原ゼミナールの学生が、2月10日(金)に東京大手町の「AgVenture Lab」で開催された第3回学生地域づくり・交流大賞(主催:一般社団法人全国農協観光協会)の最終審査会で最高賞となる「大賞」を受賞しました。

石原ゼミが発表したテーマは、「秋田でんこ小豆伝承プロジェクト」。2022年度より着手したこの取り組みでは、秋田県内で赤飯をつくるときに伝統的に用いられてきた「でんこ小豆」の生産量が激減しているとの課題を踏まえ、農業者・地域住民・商工業者・学校が相互に連携する体制を構築しながら市民参加型の生産活動を推進してきました。さらに、この豆の産品価値や希少性について理解するための学習の機会を設けるとともに、料理や菓子、お茶への応用方法について産学連携体制で取り組んできました。

最終審査会のプレゼンテーションでは、石原ゼミの千田涼未ゼミ長(3年)と門間由芽奈副ゼミ長(3年)がプロジェクトの趣旨や約1年間にわたる活動内容、生産する上での課題などを審査員や聴衆の方々に紹介しました。受賞後、学生たちは「秋田県で受け継がれてきた食文化を伝承するために、微力ながらも貢献することができて良かった」、「次年度も秋田に足を運び、生産活動や伝承活動を進めていきたい」との感想を述べていました。石原ゼミが生産に携わった「でんこ小豆」は、3月より秋田市で豆類の卸売を行う有限会社鈴和商店や秋田県内のスーパーマーケットなどで販売される予定です。



農と食を通じた地域の課題解決に向けて取り組んでいます



でんこ小豆の新たな活用について提案しました



石原ゼミではこのプロジェクトを継続して進めていきます

大学

MGUのキャリア支援 ～OGの生き方・働き方に学ぶ～



今年度は学生からの要望に応じて、OGとのつながりを意識したキャリア支援を展開しています。

1. 本学主催「企業研究セミナー(オンライン)」

2月13日～28日に開催します。3月から本格的に就職活動を始める学部3年生・大学院1年生を力強くサポートするための企画です。例年、本学の学生を採用したいという企業様にご参加いただいておりますが、今年度はこれに加えて、OGが日ごろ活躍の様子を伝えていただける企業・団体約65社にご協力いただきます。各企業に関する情報を得て、視野を広げるのはもちろんのこと、「OGのように生き生きと活躍したい」「こんな仕事をしてみたい」など、数年後の働く自分を具体的に想像しながら、キャリアパスをじっくりと考える機会にもしていただきたいと思います。

2. 「キャリアアップセミナー」

様々な分野で活躍する女性達をゲストにお迎えし、その方の過去・現在・未来のストーリーを伺うことで多様な生き方を学ぶセミナーです。今年度は、多くのOGにゲストでご登壇いただきました。後期からは対面で実施することができましたので、目の前で語り掛けるOGに学生たちはより心動かされ、質疑も活発になされました。

3. 「OGとの集いカフェ」

6年ぶりに再開しました。OGを囲んで座談会形式でお話を伺う企画です。学生達はリラックスして和やかにお話を伺うことができました。OGの皆さんにも、久しぶりに母校を訪れ、後輩と交流できたことを喜んでいただきました。



2023年度も引き続き学生のロールモデルとして、多くのOGをお招きしたいと考えております。ご協力いただけるという方はぜひご一報いただけますと幸いです。

【問合せ先】
キャリア支援課 career-c@mgu.ac.jp

「Mix名取フェスタ～健康タウンプロジェクト～」に
出展しました

大学



「Mix名取フェスタ～健康タウンプロジェクト～」が名取市で開催され本学スポーツサイエンスラボが出展しました。

このイベントは名取市が市民の健康増進を目的とし、市と連携している各団体が「健康」をテーマに知識や技術を一般市民に提供するイベントです。本学からはスポーツサイエンスラボが出展し、筋肉量、体脂肪率、運動機能などのバランスが確認できる機材を使った測定コーナーを提供しました。また、一般教育部の渡辺圭佑助教が、子どもと大人と一緒に楽しめる運動遊びを紹介するステージ発表を実施、学生と来場した子どもたちによるデモンストレーションで会場を大いに盛りあげました。

スポーツサイエンスラボは、研究や活動の成果を社会に還元することで、地域の健康増進とスポーツを楽しめる社会づくりにも貢献しています。



測定コーナーには山田司郎名取市長の姿も



渡辺圭佑助教によるステージ発表

中高クリスマス礼拝は 中高合同、3年ぶり大学講堂で実施



今年度中高クリスマス礼拝は、3年ぶりに大学講堂において中高合同で献げることができました。

理事長・学院長・宗教総主事の佐々木哲夫先生より「羊飼いのクリスマス」と題してお話していただきました。わたしたち(羊)のために命をかけて守り導いてくださる羊飼いとしての主イエス・キリストの誕生を感謝し、お祝いすることができました。

コロナ禍にあって、発声による賛美やハレルヤコーラスを含む合唱、吹奏楽による演奏も控えたかたちでしたが、ハンドベルや弦楽による賛美演奏、キャンドルサービス等、可能なかたちでもできたことはとても感謝でした。



宮城県合唱アンサンブルコンテストで高校音楽班が銀賞、 中学音楽班は金賞と県合唱連盟理事長賞を受賞！

中学校・高等学校



中高音楽班は聖歌隊として宗教行事で賛美をするほか、文化祭では脚本や編曲など、全て自分たちの手で作り上げるミュージカルを行っています。新型コロナウイルス感染症により活動を制限される中、12月に行われた宮城県合唱アンサンブルコンテストで中学音楽班は金賞、高校音楽班は銀賞を受賞しました。中学音楽班は優秀団体として県合唱連盟理事長賞も受賞！「歌は心」という音楽班のモットーを大切に、これからも豊かなハーモニーを作り上げていきたいです。



高校ソフトテニス班、結果を残した 今シーズンの経験を糧に、来季に向けて練習に励みます。

中学校・高等学校



11月初旬に行われた県新人大会で、団体戦は第3位、個人戦では3ペアがベスト16に入り、12月の県インドア大会への出場を決めました。そのインドア大会団体戦では、予選ブロックを1位で通過、決勝リーグを1勝2敗で終え、第3位となりました。惜しくも東北インドア大会への出場権を得ることはできませんでしたが、選手たちは持てる力を存分に発揮してくれました。今回の試合の経験を忘れずに、冬の期間の練習に励んでいきたいと思います。

「コロナ禍にあっても豊かな経験を」



7月に予定していた5歳児のサマーキャンプ。豪雨のため10月にオータムキャンプと名称も変更して行いました。17:30夕食の時間です。

「せんせい!何もこぼしていないのに、ランチョンマットもテーブルもびしょびしょになってる!」と夜露に驚いた子どもたち。…でもなんだか不思議でおもしろい。「お替りはどこだっけ?」と配膳台の場所がわかりにくい。…暗くてちょっぴり怖いけれどそのドキドキがおもしろい。どんなことも楽しみに変える柔軟性は子どもたちの頼もしい力ですね。

真っ暗な森の上にぼっかりと浮かぶお月様は、まるで絵本の挿絵のようでした。夜のこども園で起こる不思議な出来事。ドキドキわくわくいっぱい、素敵なキャンプの夜でした。

感染予防対策を講じた上で、行事の内容も充実させて予定通り進めてきました。クリスマス礼拝は3年ぶりに全園児親子で集い、園長先生を顧問に有志によるコーラスも披露しました。コロナ禍にあっても「森のこども園だからできる経験」をこれからも大切にしていきたいと思います。



同窓会通信

今こそ伝えたい、アメリカ赤十字社員、 フェルディナンド・ミクラウツの生涯

コロナが収束していない世界に、ロシアのウクライナ侵攻という衝撃的な事態が起こりました。2022年2月24日の報道に世界中が愕然としたはずですが。その二週間前、私は「フェルディナンド・ミクラウツ自伝より1943-1952: アメリカ赤十字社員の見た戦中戦後のアジア」を出版しました。これは、2012年に96歳で亡くなったFerdinand Micklautz (通称ミック)が自費出版した自叙伝「Faces Along the Way」を編訳したものです。

ミックはアメリカ赤十字社員として、戦中戦後、アジア各地で人々の救済にあたりました。1947年に廃墟となった日本に派遣され、日本人が必要としているものを理解し提供しようと全国を奔走しました。ミックは任期満了後も日本に留まり、GHQ公衆衛生福祉局における身体障がい者援助プログラムを任されます。視覚障がい者支援の一端としてヘレン・ケラーを日本に招き、講演旅行も企画されました。ケラー女史の講演は宮城学院でも行なわれたと聞きます。

現在広く使われている「リハビリ」という言葉は、ミックと同僚が推進したプログラムから生まれたものです。彼らは、日本社会から見放されていた障がい者を支援するために、身体障がい者福祉法のもととなる原案を作成しました。その任務を終えたミックは、再び赤十字の仕事に復帰し、米軍占領下の沖縄に厚生福祉協会を設立します。その後、朝鮮戦争が勃発した韓国に派遣され、戦渦で苦しむ人々のために働きました。



宮城 紀美
宮城学院中学校24回生・
宮城学院高等学校26回生
1974年 宮城学院高等学校卒業

現在日本でミックの存在を知る人はほんの僅かです。幸運なことに、私はホノルルでミックと出会い、彼の体験談が本になることを知りました。ワシントンDCに留学してからアメリカで40年以上暮らし、翻訳・リサーチの仕事にも長年携わっていましたが、別けてミックの体験談は日本で記録として残したい、その翻訳は自分がやらなければならないと強く思いました。

ウクライナ侵攻の後、私はミックの本を読み直しました。戦中戦後の混乱と窮状の背後に、自らの危険を顧みず、苦しむ人々のために一心に仕事をした人々がいたこと、そして今この時も、ウクライナを含む世界のあちこちで、戦渦の中、住居、食料、医療や教育の場を奪われた人々を助けたいと働いている人たちがいる。臨場感が一層迫ってきました。私には一体何ができるだろうか、ずっと問い続けています。

この出版は、宮城学院高校時代の恩師や同級生たちを中心に、多くの人々の支援により実現しました。一人でも多くの日本の方に、ミックが語ってくれたことを知って頂きたい。今できることを一緒に考え実行していく仲間が増えることを願っています。



宮城学院での思い出 旅立ちの時を迎えて

1日ごとに春の足音が増してくる3月。今年もたくさんの園児、生徒、学生、院生たちが、宮城学院を巣立っていきます。ここでは、この春卒業、修了し、新たなステージへと進む皆さんに、宮城学院で過ごした日々の思い出をうかがいました。

こども園に通える1日1日が、当たり前ではない特別な時間 —初めての体験、未知への期待、人々との出会いにあふれた3年間—

息子と幼児讃美歌を歌いたい、一緒に園生活を楽しまたい、そう思いながら3年間を過ごしました。コロナにより参加できない行事もありましたが、昨年末、こども園のクリスマス礼拝が入園後初めて礼拝堂で行われ、親子で出席することができました。入園時、讃美歌を覚えることもままならなかった息子が堂々と歌っている姿を見て、胸が熱くなり、人生で1度きりのこの礼拝で、一緒にお祈りを捧げることができてよかったと心から思いました。こども園に通える1日1日が新しく、息子にとっては毎日が特別。登園時、入口で



「いってらっしゃい」と声をかける、友達と森の中を散歩する、一緒にご飯を食べる、拾った植物を大切に持ち帰る、そのありふれた日常の全てが大切な思い出です。腕白な息子を大きな愛で見守り、導いてくださった先生方には感謝の気持ちでいっぱい。こども園での出会い・経験は、息子にとっても私にとってもかけがえのない財産となり、共に学び成長することが出来た3年間でした。

森のこども園保護者代表 三浦 理恵子さん



友人たちや先生方に本当に感謝し、 周囲の期待に応えられるように精一杯頑張りたい

1年生の時、同じ部活の先輩や友人たちから薦められて入った生徒会執行部は、今では私の中ですごく大きなものになっています。生徒の皆さんにより快適な学校生活を送っていただけるよう試行錯誤したこの3年間はすごく充実したものになり、高校でもぜひ続けたいと考えています。

今年は3年ぶりとなる合唱コンクールも、無事開催することができました。生徒の皆さん、また、先生方の協力なしにはできなかったことだと思っています。本当にありがとうございました。私自身行事の企画や運営の仕事はすごく好きで、1年生の時からあこがれを抱いていました。ですので、最初で最後ではありましたが開催することができてすごく嬉しかったです。

この3年間私を支えてくれた友人たちや先生方には、本当に感謝しています。これからは私もこれまで以上に周囲の期待に応えられるように、精一杯頑張りたいと思います。

宮城学院中学校 高橋 凛好さん



この3年間は人生で最も価値のあるもの 隣人愛の精神を胸に自信を持って歩んでいきたい

私が宮城学院高等学校に入学してから早3年が経ち、卒業を迎えようとしています。この3年間、様々な出来事があり、苦労した点も多くありました。しかし、振り返ってみると、この3年間はこれまでの人生で最も価値のあるものであり、友人に支えられた3年間だったと感じています。

私たち高校3年生の学校生活はオンライン授業から始まりました。それまで、オンライン授業というものを行ったことがなかったことや新しい同級生、環境にとっても緊張していました。新型コロナウイルスの影響で思うように行動できなかったことも多々ありましたが、学校への登校が再開されると、初めて対面でお話する同級生も沢山声をかけてくださり、私を勇気づけてくださったことも鮮明に覚えています。

これからの生活はみんなそれぞれの歩みになります。宮城学院高等学校で学んだ「神を畏れ、隣人を愛する」という隣人愛の精神を胸に自信を持って少しずつ歩んでいきたいと思っています。

宮城学院高等学校3年 早川 滯さん



宮城学院の4年間で学んだことを忘れずに、 春から新たな道で活躍できるよう、日々成長していきたい

幼いころからの「保育や教育に携わりたい」という思いを胸に入学し、大学生活を通しこれまで様々な経験をすることができました。そして、卒業の時を迎えた今、私の周りにはかけがえのない仲間や恩師がいます。

中でも、友人の誘いで所属した学友会執行委員会での活動は、私の大学生活、人生において、大きな糧となりました。授業の合間を縫いながら仲間たちと協力し助け合い、大学行事の運営を執り行うことができました。学友会執行委員会の委員長として、仲間とともに活動できたことを誇りに思います。お力添えいただいた職員の方々、行事に参加していただいた学生の皆様、誠にありがとうございました。

春からは、第一志望の保育園に就職することになりました。就職活動をするにあたり、不安な気持ちを抱えた私を支えてくださった所属する幼児教育専攻の先生方、職員の方々、誠にありがとうございました。宮城学院の4年間で学んだことを忘れずに、春から新たな道で活躍できるよう、日々成長していきたいと思っています。

宮城学院女子大学 教育学部教育学科 幼児教育専攻4年 渡部 菜々さん



「教師になる」という夢に向かって努力してきた二年間、 卒業後は、失敗を恐れず様々なことに挑戦し成長していきたい

大学での学びがとても楽しかったため、大学院に進学することを選びました。大学院生活は自由に使える時間が沢山あるので、主体的に動けば多くのことに挑戦できると感じました。とはいえ大学院で学べる期間は二年間です。初めはどのように過ごしていけばよいかわくこともありました。

しかし、恩師との会話や充実していた教育実習での思い出が「教師になる」という私の夢を後押しし、二年間夢に向かって努力することができました。この二年間は多くの先生方から指導・ご助言もいただき、自分の考えの甘さや力不足に気づかせていただきました。それにより、試験当日は自信を持って受験することができました。

宮城学院では、ずっと傍に居て支えてくれた友人、そして厳しくも温かくご指導して下さった多くの素晴らしい恩師と巡り会うことができました。本当に感謝しております。卒業後は、失敗を恐れず様々なことに挑戦し成長していきたいと思っています。

宮城学院女子大学大学院 人文科学研究科 英語・英米文学専攻2年 郡山 美洸さん



学時代の一番の思い出は、よさこいサークルでの活動です。高校まで運動にはほとんど縁がなかったのですが、キャンパスの広場で先輩たちがよさこいを踊っている姿がとても楽しそうで、心惹かれるものがありました。もともと人前に出ることが苦手だったので、そんな自分を変えられるかもしれない、という期待もありました。当時、サークルは部員100名規模を誇る大所帯。その中で私は、2年生が中心となる地元宮城で開催される「みちのくYOSAKOIまつり」へ向けた作品作りで、曲班の班長を務めました。振り班、衣装班、曲班の3つがあるうち、曲班はその名の通り曲づくりを担います。ゼロからの曲制作は想像以上に大変でした。まずメロディーを作るところから始まり、同期や先輩たちと話し合いアドバイスをもらい、振り付けや衣装とも連携を取りながら試行錯誤する毎日。もちろん通常の練習や、北海



大学時代はよさこいサークル「Posso ballare?」に所属。

道や名古屋など全国各地への祭り遠征もあり、授業や実習以外の時間はサークル活動に没頭していたと言っても過言ではありません。休みもほとんどありませんでした。みんなが同じ目標に向かっていて、時間は、かけがえないものだったと思います。その結果、第18回「みちのくYOSAKOIまつり」では最高成績の6位入賞を果たすことができました。サークル活動を通じて学科の垣根を超えた友人に恵まれ、自分の視野が広がったと思います。資格の勉強や就活



遠藤 紗貴さん

2017年度 宮城学院女子大学
学芸学部 発達臨床学科卒業
仙台市人來田保育所 勤務

宮城県石巻市出身。石巻西高等学校卒業。大学時代は幼児教育を専攻し、保育士資格のほか幼稚園教諭、認定心理士の資格も取得。4年間所属していたよさこいサークルでは曲班の班長を務め、「みちのくYOSAKOIまつり」で6位入賞を果たす。2018年4月に仙台市の保育職として採用され、現在、人來田保育所に着任。これまでに0歳児～5歳児まで、幅広い年齢のクラス担任を務める。

大学での経験が糧となり 自分を支えてくれている

大

学時代の一番の思い出は、よさこいサークルでの活動です。高校まで運動にはほとんど縁がなかったのですが、キャンパスの広場で先輩たちがよさこいを踊っている姿がとても楽しそうで、心惹かれるものがありました。もともと人前に出ることが苦手だったので、そんな自分を変えられるかもしれない、という期待もありました。当時、サークルは部員100名規模を誇る大所帯。その中で私は、2年生が中心となる地元宮城で開催される「みちのくYOSAKOIまつり」へ向けた作品作りで、曲班の班長を務めました。振り班、衣装班、曲班の3つがあるうち、曲班はその名の通り曲づくりを担います。ゼロからの曲制作は想像以上に大変でした。まずメロディーを作るところから始まり、同期や先輩たちと話し合いアドバイスをもらい、振り付けや衣装とも連携を取りながら試行錯誤する毎日。もちろん通常の練習や、北海

なども励まし合って乗り越えてきたので、当時のサークルの仲間たちとは今でも仲が良く、卒業してから頻りに会っています。現在は、仙台市の保育職として子どもたちが健やかに成長していけるよう保育計画を立て、さまざまな活動を行っています。幼い頃に通っていた幼稚園の先生に憧れて保育士を目指したので、ずっと持ち続けた夢を叶えることができていることに嬉しです。仕事のやりがいは、毎日変わっていく子どもの姿が見られることです。昨日できなかったことが今日できるようになっていたり、苦手を克服できたり、子どもの成長を間近で見守れることに幸せを感じます。また、大学の授業で子どもの背景にある家庭環境や、子どもの行動の裏に隠された心理などを深く勉強できたことは、今の仕事に役立っています。自分の思い込みだけで相手の心情を決めつけず、あらゆる角度で観察し、アプローチを考えることの大切さは、日々

の業務で痛感しています。

サークルに、実習と全力で駆け抜けた大学の4年間は、唯一無二の青春であり、今の自分を支える糧となっています。在校生の皆さんも、ぜひ勉強だけでなくアルバイトやサークル活動など大学生にしかできないことに取り組んでほしいと思います。経験したことすべてが社会人生活での糧となると思うので、今を全力で楽しんでみてください。

人とのつながりに感謝し、 音楽の素晴らしさを伝えていきたい

学附属の音楽教室でピアノを習いたいと思い、宮城学院中学校を受験しました。それから数えると、12年もの時間を宮学で過ごしたことになります。大学進学の際には、幼い頃から続けてきたピアノではなく声楽コースを選びました。きっかけは高校3年の時に参加したミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」で主役を務めさせてもらったことです。もともと音楽教室で副科として声楽を習っていたのですが、この舞台で歌の魅力にめざめ、声楽の道を歩むことにしました。大学4年間と研究生時代には、演奏会をたくさん経験させていただきました。校内だけでなく学外の大きなホールで歌う楽しさ、演奏を通して人とながる楽しさを知りました。また、イタリアやフランスなどさまざまな国の歌を歌うので、語学の勉強にも励みました。宮学は讃美歌をはじめピアノ、ヴァイオリン、パイプオルガンなど、多種多様な音楽



毎年のソロリサイタルは、大好きな紫陽花の季節に行っている。

にあふれた素晴らしい環境です。ここでいろいろな音色、音質に触れることができたことも、私の貴重な財産となっています。研究生修了後は、中学校と特別支援学校で10年ほど勤めました。音楽の教員として生徒たちと過ごす毎日やりがい満ちていました。一方で「もう一度声楽を学びたい」という思いもありました。そこで、息子が小学生になったことを機に東京芸術大学大学院で学ぶことにしました。もちろん、教員の仕事を続けながらです。教員と大学院生

の両立はハードでしたが、これ以上ないほど刺激的で充実していました。ドイツに留学経験のあるソプラノの先生にレッスンしていただき、また多彩な楽器やアートと触れ合ったことで生活が鮮やかになり、自分の表現に広がりが出たと思います。

自らの音楽活動を再開してからは、顧問を務めるコーラス部の高校生とともにソロのコンクールにも出場するようになりました。昨年の「国際声楽コンクール東京」では、2部門で1位に選ばれましたが、「勝ちたい」というよりは「私の歌を聴いてほしい」「自分を成長させたい」という気持ちで本番に臨みました。2部門にエントリーしたことで準備はかなり大変でしたが、苦勞の分だけ得られるものも多かったと思います。

これから私の人生は、人とのつながりによって支えられてきました。今歌うことができているのも、さまざまな出会いのおかげです。コロナ禍の2020年から毎年開催しているソロリサイタルでは、同じ空間で生の音を共有できること、そこから生まれる人とのつながりに感謝を込めて歌っています。これからも出会いに感謝し、音楽の魅力を伝え続けていけたらと思っています。

鈴木 麻由子さん

2001年度 宮城学院女子大学
学芸学部音楽科卒業 研究生修了
宮城県古川黎明高等学校 勤務

宮城県仙台市出身。宮城学院中学校・高等学校卒業。音楽科卒業後に東京芸術大学大学院音楽研究科研究生を修了。中学校、特別支援学校で教員を務めながら、結婚・出産・育児を経て東京芸術大学大学院に入学。2017年から宮城県古川黎明高等学校教諭。3年生担任、コーラス部顧問、2022年「国際声楽コンクール東京」にて、グランプリ部門1位、歌曲部門1位に輝く。



Information

オリーブリーフ募金者芳名

【2022年10月1日～2023年1月31日受付分】
◎募金総額59,591,250円(2023年1月31日現在)

一般・法人

金200,000円
伊澤 郡蔵様金100,000円
庄司 健二様金60,000円
宮城学院高等学校
第32回生同級会金50,000円
匿名1名様金10,000円
金子 尚仁様
渡邊 やす子様
仙台五橋教会様

大学・大学院

金100,000円
木幡 陽子様金40,000円
根来 興宣様金30,000円
匿名1名様金10,000円
清野 誠様
相馬 裕様
匿名2名様金5,000円
飯塚 清様
匿名1名様

同窓会

金500,000円
小林 幸子様
阿部 俊子様金200,000円
佐藤 絢子様金100,000円
百瀬 由美子様
匿名1名様金50,000円
中野 弘子様
八子 登美子様
平井 直子様
匿名4名様金30,000円
藤林 節子様
板橋 肇子様
成田 由紀子様
山田 玲子様
匿名1名様金20,000円
加藤 亮子様
内藤 邦子様
稲井 慶子様
阿部 喜代子様
小野寺 なつ子様
加藤 啓子様
菅原 房子様
笹子 喜美江様
匿名5名様金10,000円
黒丸 久子様
松岡 智嘉子様津田 緋沙子様
八木 晶子様
倉金 和子様
菊地 厚子様
菊地 みつ子様
中西 利美様
大江 鐵子様
菊池 英子様
大村 貴子様
鈴木 文子様
菅野 英子様
角田 静恵様
岡 幸子様
中島 由美子様
岩崎 啓子様
鴨居 治枝様
一柳 やすか様
麦倉 令子様
斎藤 房江様
高木 崇子様
奥口 静子様
木村 幸子様
坂下 順子様
藤原 美幸様
佐々木 海帆様
志賀 順子様
今野 眞樹様
伊藤 眞理子様
中村 牧子様
佐々木 美保子様
信夫 理利様
斎藤 親子様
遊佐 英子様
千葉 治子様
新沼 せつ子様
今野 栄子様
岩佐 喜美子様
石原 あけみ様
浦山 淑子様
斎藤 重子様山田 易子様
澤木 エミ様
富並 かね子様
小山 由紀子様
赤羽 洋子様
板垣 嘉子様
野母 喜代子様
岡田 みね子様
藤村 正子様
木村 公子様
木村 笑子様
熊谷 美代子様
井上 和子様
朽木 千里様
菊地 芳子様
高木 奈生子様
米谷 弘子様
土佐 純子様
佐藤 敦子様
故 川村 京子様
匿名34名様金5,000円
佐藤 節子様
山本 幸子様
竹村 薫様
東條 富美子様
佐藤 君子様
宮崎 幸子様
荒井 裕子様
匿名1名様金3,000円
菊地 美知子様
富永 和子様
佐藤 典子様
丑田 今日子様
田鎖 俣子様
匿名7名様金2,000円
木場 俊子様
佐藤 かよ子様
飯坂 真理様
中村 温子様
匿名1名様金1,000円
匿名2名様

役員・教職員・旧教職員

金500,000円
佐々木 哲夫様
本田 辰雄様金100,000円
太田 富美子様金50,000円
武田 雅比人様金30,000円
今野 孝一様
早矢仕 智子様
加藤 嘉子様
大坂 田茂子様金20,000円
伊藤 佳代子様
三友 安紀子様
匿名2名様金10,000円
八木 祐子様
細川 純子様
匿名1名様

皆様のご理解とご協力に深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

払込方法

1 銀行からのお振込み

本学院指定の振込用紙に必要事項をご記入の上、
最寄りの銀行等からお振込みください。※七十七銀行本支店、仙台銀行本支店から本学院指定用紙を使用してお振込みいただきますと
振込手数料はかかりません。その他銀行では手数料が発生する場合があります。本学院指定の
振込用紙に必要事項をご記入の上、最寄りの銀行からお振込みください。

3 現金書留

募金事務局宛てにご送付ください。

送付先

学校法人宮城学院 募金事務局(総務人事部内)
〒981-8557 仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1

2 WEBサイトからのお振込み

クレジットカード決済で、
ご寄付頂けます。<http://kifu.mgu.ac.jp/>

4 現金持参

募金事務局にお越しください。

寄付控除のための書類送付

各金融機関・決済代行業者を介して学校法人宮城学院へ入金されます。入金確認後、お礼状・寄付控除に必要な書類のご送付となります。

また、領収書発行日は、お申込み受付日やカード決済口座からの振替日ではなく、本学院への入金日となります。本年12月にお申込みいただいたクレジットカードによる寄付の領収書は、翌年の日付で発行される場合があります。この場合、寄付金控除も翌年の対象となりますので、あらかじめ御了承ください。

遺贈による寄付をお考えの方へ

「遺贈寄付」とは、卒業生・教職員・一般篤志家の方が所有されている資産の一部または全部を、母校などに寄付する制度です。近年、遺言に対する関心の高まりとともに、慣習にとらわれない自由な相続を求める傾向や、遺贈を通じた社会貢献が目立っています。学校法人宮城学院では、財産を母校に寄付することで社会に貢献したいとされる方々の便宜をお図りするため、遺贈による寄付制度として皆様にご紹介させていただきます。東北の女子教育を牽引する本校にご理解いただき、ご協力賜りますようお願い申し上げます。遺贈によるご寄付をお考えの方は、募金事務局までご連絡ください。ご相談の内容は、機密を保持します。いただきました個人情報は、本学「個人情報保護への取り組み」に従って厳重に取り扱います。